

巻頭言 「裁かれる」という感覚

聖学院大学総合研究所副所長
聖学院大学大学院客員教授

高橋 義文

昨年春、ラインホルド・ニーバー著『人間の運命——キリスト教的歴史解釈』を、同僚の柳田洋夫氏との共訳で上梓した。⁽¹⁾ニーバーは、二〇世紀アメリカを代表する神学者であるとともに、冷戦期アメリカの外交政策に関わった政治思想家でもある。『人間の運命』は、『人間の本性と運命』の第二巻に当たり、第一巻『人間の本性』⁽²⁾とともにニーバーの名著と見なされてきた。副題にあるように、この書は、キリスト教的歴史論である。そこには、人間の歴史について、ニーバー独特の解釈が、人間と歴史をめぐる古今の思想と自在に対話しつつ丁寧にかつ強靱な粘り強さをもって打ち出されている。

翻訳にはいささか長い時間を要したが、その作業に当たりながら、筆者の脳裏から離れない問いがあった。それは、この書に盛られている思想の意義はどのようなものか、とりわけわれわれの国において、この思想はどのような意味を持つのか、という問いである。この書は、いわゆるキリスト教神学の専門に属する、それも伝統的神学とは一線を画するきわめて独創的な書であり、専門家にさえ読

みやすいものではない。ところが、この書に代表されるニーバーの思想は、二〇世紀半ば以降のアメリカの知的伝統に思想的にも実践的にも大きな影響を与えてきたのである。いくらキリスト教国といっても、そのような事例はそう頻繁にあるわけではない。むしろ稀有なことである。一体この書の何がそのような状況をもたらしたのだろうか。そしてそれは、二一世紀、それもこの日本に、何をもたらすのだろうか。

こうした思いは、もちろん、この書の翻訳作業の過程で新たに出てきたものではない。それは、ニーバーの思想に本格的に触れるようになって以来常に脳裏に引っかかっていた、いわば筆者年来の問いである。しかし、この書の翻訳と格闘するなかで、その問いはそれまでにない鋭さと緊急度を増して迫ってきた。そしてそれは、出版後も弱まるどころかますます強くなっている。現在、過去になされた二つの訳に学びながら、第一巻『人間の本性』を新たに訳しなおす作業に取りかかっているが、そこにおいても、その問いはさらに重くのしかかってきている。

そのような中、昨春秋、ある書評紙に、『人間の運命』についての書評が掲載された。筆者はそれを読んで心底から驚かされた。福田隆雄氏による「裁かれるという感覚」と題された本書への書評である。⁽³⁾驚かされたのは、この書の内容が見事なまでに把握され、それが適切に要約されたうえで、この書の意義が次のように喝破されていたからである。

だが、キリスト教信仰をもたない、神の恵みと憐れみと力を信賴しない……ものからすれば、本書の主張には、ただ疑問あるのみだろう。

では、そのような違和感をもつ読者にとって本書がもつ重要なメッセージとはなにか？

それは、裁か、れる、という、感覚。自由な存在である人間が己の限界を自覚しない。傲慢さ^①を、さらに徹底して歴史の「永遠ノ相ノ下」で問われるということである。地位あるものが責任を放棄し、人種差別が蔓延し、むき出しの暴力と吹き荒れるフェイクニュース。この千変万化する現実世界において、この感覚は、私たちがもつべき世界観と歴史観に大いなる示唆を与えてくれる。

さらに敷衍すれば、いまだ核の脅威におびえ、早朝から「Jアラート」が喧しい、我々の「いま・ここ」において、第二次大戦前、ヒトラーの台頭と日本の軍国主義の時代に行われた講義をもとにし、刊行後、核戦争危機の時期の超大国アメリカに多大な影響を与えた本書の意味は、はてしもなく重いのだ。

……「われわれの運命についての知恵は、われわれが自らの知識と力の限界を謙虚に認めることができるかどうかにかかっている」という本書のことばとニーバーの祈りを……今一度かみしめたい。

なぜなら、冷笑主義者でも、理想主義者でもなく、「希望するすべもなかったときに、なおも望みを抱いて、信じ」る「ローマの信徒への手紙四章一八節」堅固な意志をもつ人々によつて「新たな世界」は、建設されるはずだから。（「」内は補足、強調付加）

これは、一九七三年に第一巻『人間の本性』を訳した、自らを「キリスト教にはもともと素人^④」と呼んだ哲学者野中義夫の以下の評言に見られるものと共通する。実はこれもまた、『人間の運命』の翻訳作業中に発見したものである。

本書は、何よりもキリスト教神学の書である。しかしまたそれは同様の重さで「現代文
化批判の書」と言える。……「神学」と「現代批判」との結びつき、というよりも両者の
同一性ということに、私は深大な意義を感じ得せずにいられない。⁽⁵⁾

福田氏は、野中が「現代批判」と呼んだニーバーの思想の性格を、「裁かれる感覚」と表現した。
ともに正鵠を射ているが、表現としては後者のほうがはるかにニーバー的である。やや大げさに言え
ば、これまで、ニーバーの思想の本質をここまで端的に表現した評言はなかったのではないか。ニー
バーの思想からこの「感覚」を受け止めた評者の研ぎ澄まされたその感覚に深い敬意を覚える。今
後、ニーバーの意義は、これを踏まえるところから論じられなければならないであろう。

とはいえ、「裁かれている感覚」を表面的に受け止めて、ニーバーの思想をそれのみで理解し尽く
そうとするなら、それはニーバーの本質を見誤ることになりかねない。ニーバーにおいて「裁き」は
そのままほかならぬ「恵み」に包まれているからである。ニーバーの『人間の運命』の論議の魅力の
重要な一つは、「恵み」と歴史との関係をめぐる議論にある。そこでは、裁きが「恵みの逆説」とし
て、深淵にまた豊かに論じられているのである。

もちろん、福田氏は、それを見逃してはいない。ニーバーにおける裁きが「希望」にこそつながる
ものであることを指摘しそこに意義を見出しているからである。しかし、その希望は、「恵みの逆説」
を踏まえた希望なのである。

かつて、このニーバー的「恵みの逆説」を踏まえて著された大木英夫『終末論』は、次のように締

め括られている。

中世の文化総合の実現を導いた原理は、「恩寵」「恵み」は自然を破壊せず、これを完成する」というものであった。われわれが新しい文化総合を探索するときに必要なものは、「恩寵は歴史を破壊せず、これを成就する」という原理であると思う⁽⁶⁾。

いま、世界に、そしてわが国に必要なのは、「裁かれる感覚」なのではないだろうか。しかし、それは、究極的に、「恵みの逆説」によって媒介される感覚でなければならない。そこにはじめて、歴史の破壊ではなく、歴史の成就という希望がそれこそ逆説的に見えてくるのではないだろうか。

注

- (1) ラインホルド・ニーバー『人間の運命——キリスト教的歴史解釈』高橋義文、柳田洋夫訳（聖学院大学出版会、二〇一七年）。原著 Reinhold Niebuhr, *The Nature and Destiny of Man: A Christian Interpretation*, Vol. II. *Human Destiny* (New York: Charles Scribner's Sons, 1943).
- (2) Ibid., Vol. I. *Human Nature* (New York: Charles Scribner's Sons, 1941). なお、この第一巻は、過去二度翻訳出版されている。武田清子訳『キリスト教人間観 第一部（人間の本性）』（新教出版社、一九五一年）、野中義夫訳『人間の本性と運命 第一巻、人間の本性』（産学社、一九七三年）。

- (3) 福田隆雄「裁かれるという感覚——ニーバーの主著が翻訳されたことを喜みたい」、『図書新聞』(二〇一七年一月四日)。(福田氏は株式会社作品社の編集担当。)
- (4) 野中義夫「訳者のことば」、野中訳(注2参照)、二頁。
- (5) 野中義夫「訳者あとがき——現代文化にとつてのR・ニーバーが意味するもの」、野中訳(注2参照)、三三七頁。
- (6) 大木英夫『終末論』(紀伊国屋書店、一九七二年)、二四二頁。